

なぜ社会貢献は必要か

一人間の本性の謎に迫る— 講演要旨

NPOグループ会長 中西 真彦 氏

2005年8月11日 東京都・赤坂コミュニティープラザ

主催：特定非営利活動法人 未来構想戦略フォーラム

『第43回未来構想フォーラム』より

パーソナル・データ

中西真彦（なかにし・まさひこ）氏。1930（昭和5）年、三重県生まれ。京都芸術大学卒。関西大学大学院哲学専攻科博士課程終了。同大学の助手を勤めた後、ベンカンに入社。社長、代表取締役会長。創業時の小規模会社をグループ年商一千億円まで育て上げる。配管用継ぎ手メーカーでは世界最大手。

東京商工会議所副会頭、新産業人会議代表、国際科学振興財団会長、政府税調委員等を歴任。現在は産業NPOグループ会長。今年9月に『人間の本性の謎に迫る』（日新報道）を刊行した。

**幕末の志士のように殺されはしなかったのですが
社会的生命を断たれたような格好になりました。**

私は若い頃、零細中小企業経営者から出発して世界を飛び回っていましたが、50代に入ったとき「必死で働いて、会社の売り上げを一千億、二千億に伸ばしても、所詮、ゼニ儲けに過ぎない」という気がして、この辺りから「残された人生において、自分が生きた痕跡、何か社会への貢献を残さないと、この世に生を受けた意味がない」という青春時代に叩き込まれた人生哲学に駆られて、先ず手始めに財界活動を志しました。

私は生れつき〈思ったことは歯に衣を着せずに言う〉タイプで、当時、東京商工会議所の副会頭でしたが、この地位につくと、政府の重要な審議会に委員として引っ張り出されます。実際に、税制調査会、行政改革委員会、経済構造審議会、労働委員会など、数多くの審議会委員を委嘱され、郵政改革にも大蔵省財政投融资制度改革審議会専門委員として参画しました。

ところが、今お話ししたように、何事によらず遠慮会釈なく発言しますから、幕末の志士のように殺されはしなかったのですが、社会的生命を断たれた格好になりました。

一例を挙げますと、かつて労働移動（職業紹介）については、民には任さないで、官の労働省が一手に握り仕切っておりましたので、私は行政改革委員会の席上、労働官僚に論

戦を挑み「行政改革委員会は密室ではなくオープンにし、メディア（media マスコミ）を入れるべきである」と提案して、官僚による専権の非を鳴らして追いつめ〈職業紹介の民営化〉を勝ち取りましたが、私の行政改革委員会における最大の功績は、この職業紹介の民営化だったと思っております。もしも、これが成功していなかったら、経済の激動の時代に人の移動が自由にできなくて、とてもじゃないが官僚では運用できません。

ところが、このような労働省との攻防の最中に、労働省から電話が入りました。「中西さん、あなたを検察庁に送検しました」「いったい何事ですか」と不審に思いながら、検察庁に出向きましたら、検事が訴状を見て「一人の工員が屋根から落ちたなどという些細な一件で、労働省はなぜ中西さんを送検したのだろう」と言っていました。普通は担当工場長が最寄りの労働基準監督署に呼び出されて説教される程度ですが、これは明らかに官僚による陰湿な嫌がらせでありました。

その他、私は政府税調の委員を6年間やっていましたが、ズバリ言って、いま政府は完全に増税路線を取っております。私は、これは間違いだと思っております。

私が政府税調の委員だった頃は、加藤寛さんが座長でしたが、この税調委員会でも、ずいぶん厳しく減税路線を主張し、テレビ出演で論陣を張ったりしたために、官僚に睨まれて、いろいろと嫌がらせを受けました。

ところが、大蔵省はここへ来て、膨大な財政赤字を抱え込んだというので「もはや増税しかない」という事態になったのですが、私は決して良い路線ではないと見ております。

若者たちには「なぜ社会貢献が必要なのか。自己中心でいいじゃないか」という反問があります。

それはさておき、私は若い頃、大学で哲学を勉強しましたが、哲学というのは一掴を質す学問だと言われていますが、昨今の世の中は〈上っ面ばかり〉というか、テレビが象徴的ですけども、新刊書籍でも上っ面のことしか扱っておりません。

今日は『なぜ社会貢献は必要か』のテーマでお話するわけですが、世の中のリーダーの皆さんは若者たちに向かって「社会貢献をしよう」「国家への貢献を考えよ」など言いますが、若者たちには「いったいなぜ社会貢献しなければならないのか。自己中心でいいじゃないか」という反問があります。

先だって、日本青少年研究所が若者を対象にアンケートを取りました。アメリカ、フランス、韓国、中国、日本等々、同じ設問のアンケートで「あなたたちは、社会に貢献をする仕事に、自身の生き甲斐を感じますか」という設問に対して「生き甲斐を感じます」

と肯定的な回答をした比率は、諸外国の若者は六〇～七〇%でしたが、日本の若者はなんと一桁以下の低い比率でした。

次いで「人生というのは、自分の趣味に生きることが最良の生き方だと思いますか」という設問に対して、肯定的な回答を寄せた比率は、日本の若者は圧倒的に七〇%を越えま

したが、他の国の若者は10%以下でした。

老舗の超大企業が新参企業がやるような破廉恥非倫理的、反社会的な行為を平気でやっております。

文明史観で世界的に著名な評論家は「一つの文明が滅びに至る始まりは、ローマ帝国の場合でも、大英帝国の場合でも、物質の豊かさをひたすら求める傾向があつて、その反面、精神性が希薄になってくる」と言っておりますが、これはまさに今の日本も似ているのではないのでしょうか。

この問題について、京都大学教授の中西輝政という政治学者は「日本人は回復能力が高いが、臨界点に達すると、例えば、水でも百度を超えると蒸気になり、気化してもはや水に戻れないように、なかなか後戻りできない。したがって、日本の文明も、いまや60年を経過して、そろそろ臨界点ではないか」と分析されています。

戦後の日本は、GHQ（連合国軍総司令部）主導のもとに『教育基本法』が制定されて、この新しい理念で教育を受けた人々が、いまや60代にさしかかっております。

要するに、この日本という国は、小中学生から60代のおじいさんに至るまで、三世代にわたって、戦後の『教育基本法』の理念、つまり、アメリカンカルチャーの〈個人の自由〉〈個人の権利〉〈個性の尊重〉を強調した理念で教育された人々だということです。

その結果、今日の世相はどうなっているかということ、暗然とするような不祥事が相次いで起こっており、かつて、三菱地所、三井物産、東京電力、関西電力などの超大企業は〈絶対に間違ったことはやらない〉ということで、われわれは全幅の信頼を寄せておりました。

ところが、これら老舗の超大企業が、名もない新参企業がやるような破廉恥、非倫理的、反社会的な行為を平気でやっております。

例えば、三菱地所は環境汚染の土地を承知の上で売りに出し、三井物産はデータを偽造してまで、東京都に商品の売込みを図り、東京電力においては、原子力発電所の配管が破損するという重大事故が発生したにもかかわらず、修理を怠って「秘匿」するという行為が明るみに出ました。

真因を探求し是正しなければまさに日本は没落して三流国に成り果てる危険が身边に迫っております。

いったい何が故に、このような事態に陥ってしまったのでしょうか。例えば、民間企業を指導する立場にある通産官僚は、かつては〈官僚中のエリート官僚〉を自負しておりまして「一に大蔵、二に通産」ともてはやされて、ひたすら国家の行く末を案じるころの、私心のない一流の人材であったはずでした。

ところが、彼ら官僚はいま何をしているかということ、公金で裏金を作って、インサイダ

一 (insider 局内者) 取引をして、自分の懐を肥やすという、そんじょそこらの人非人がやるようなことを平気でやっておるわけです。

その一方、一般社会では何が起きているかと言うと、子どもが親をバットで殴り殺したり、親が感情を高ぶらせて子どもを刺し殺すというふうなことで、われわれが少年期には考えられなかったような事件が頻発しております。

これは要するに、戦後 60 年くらいの間に、恐るべき世相に変わったということで、これはいずれかの時点で、真因を探求して是正しなければ、ローマ帝国の没落と同様に、まさしく日本は没落して、三流国以下に成り果てる危険が迫っておるのではないのでしょうか。

何かの物事が生じたときには、先ず真因がどこにあるかを掴み取ることが大事で、例えば、身体に熱があるとき、それが肝臓癌からきているにもかかわらず、医者が「最近風邪が流行っているからね」など言って風邪薬の注射で済ませたりしたら、助かる人も助からなくて死に至るのは必然です。

GHQ主導の教育基本法によって規範教育が無視されて その影響が今の日本の社会に深刻な翳を落としているのです。

昨今の社会の病理現象にしても、その真因を正確に把握することが大事で、私はこれは大きく言って四つあると思います。

一つ目は、家庭教育の崩壊で、このことについては本誌 2004 年 11 月 1 日号で『教育改革をどう進めるか』と題して、詳細に述べておりますから、ご参照下さい。

私は今、孫と一緒に暮らしていますが、雷がゴロゴロ鳴りはじめたとき「マアちゃん、ウソをつくよ、雷さんにべろを抜かれるよ」と言うと、慌てて口を押さえます。あるいは、泣き止まないとき「雷さんが、おへソを取りに来るよ」と言うと、ピタリ泣き止みますが、一事が万事で、家庭教育は非常に大事です。

二つ目は、小中学校教育における〈規範教育〉の欠落で〈弱い者を苛めてはいけない〉〈他人のものを盗んではいけない〉というふうな倫理・道徳などの規範教育が欠落しております。この問題について、臨教審の座長だった大脳生理学者（元京都大学総長）の岡本道雄さんは「中西さん、子どもの規範教育には〃臨界期〃というものがある、その期間内で教えなければ身に付きません。具体的に言うと、小学生から中学生の低学年まで、つまり、十四、五歳までに叩き込まないとダメです」とおっしゃっていました。

戦後、GHQ主導下で作られた教育基本法によって、子どもたちの規範教育が無視されましたが、その影響が、今日の日本の社会に深刻な翳を落としているわけです。

例えば、欧米諸国では日曜日ごとに子どもたちをキリスト教会に連れて行き、そこで規範的な事柄を厳しく躾ておりますが、日本では逆に、宗教教育は義務教育の課程から排除されました。昔、私たちが子どもの頃には、隣近所という〃村社会〃があって一生活の知恵と言うべきものを教えてくれまして、何かちょっとでも悪戯をすると、隣のおじさんに

「こらっ！何をしている！」と言って怒鳴られたものですが、昨今は「隣は何をする人ぞ」ということで「隣近所の出来事には我関知せず」という利己中心社会に墮落しております。

日本民族の痛恨の出来事は戦後 60 年侵蝕され続けた —精神性の喪失ではないでしょうか。

三つ目は、社会環境の劣悪化です。テレビは早朝から深夜に至るまで興味本意の官能番組を垂れ流しており、スーパーへ行けばエログロ雑誌が入手できて「規範教育など糞喰らえ」というのが実態です。

四つ目は、経済第一の金権主義、あるいは、物質主義がもたらした精神的疲弊で、これに較べれば、いま中国、韓国など、周辺諸国から厳しく弾劾されているところの—首相の靖国神社参拝問題などは、日本国全体から言えば、些細な問題かも知れません。

もちろん、外交上の問題としては、歴史認識からしても、国民感情からしても、非常に複雑なものがあると思いますが、日本民族の痛恨の出来事は、戦後六十年を通じて侵蝕され続けたところの精神性の喪失ではないかと、私は考えております。

そういう精神性の回復という視点、あるいは、わが国の独自文明の立場からは、首相の靖国神社参拝は意義のあることで、昨今、経団連を初めとする日本の経済界の錚錚たる大御所たちが「小泉総理が靖国神社に参拝すると、中国や韓国との間が纏れて、日本の経済がマイナスに働く」と言って、ブレーキを掛けたそうですが、これは間違っているのではないのでしょうか。

今日の日本経済は〈飽食の時代〉に差し掛かっておりまして、世界を俯瞰すれば貧しい国がいっぱいあるにもかかわらず、なおかつ、さらに経済を発展させるべきだという考え方で、辺り構わず経済発展第一主義を続ければ、日本国にとっては失うものの方が多いのではないのでしょうか。

人間の本性の性善説・性悪説は起源以来の大課題であり 哲学の大命題であり生命科学の一大テーマです。

さて、これら社会の病理現象を見ますと、結局は人間の本性が関わってしまっていて、これは「人間の本性とは何か」という問題ですが、昔から哲学の世界で一性善説、一性悪説が問題とされてきましたけれども、未だに結論は出ておりません。

先だって、筑波大学で学生に対して「人間の本性は、善と思うか、悪と思うか」というアンケートを取ったところ、60%が「人間の本性は悪と思う」と答えましたが、私は「人間の本性は悪であって、自己中心主義、利己主義が人間の性（さが）であるが、これはいったいどうしてか」という原因を、しっかり掴むことが大事ではないかと考えており

ます。

しかし、煎じ詰めれば人類の起源以来の大課題であり、哲学の大命題であり、生命科学の一大テーマですから、一時間足らずでお話するのは無理だろうと思います。

そこで、私は九月初旬『人間の本性の謎に迫る』（日新報道刊、B5判、1600円）という本を出しますが、これは私と土井正稔（関西学院大学大学院・哲学専攻）さんの共著です。折角の機会ですから、この後、著書のポイントをお話して、今日のテーマ『なぜ社会貢献は必要なのか』に応えたいと思います。

今日は私の著書『人間の本性の謎に迫る』 の内容紹介を通して本旨に迫りたいと思います。

昨今、鬱病がものすごく流行っていますが、これは俗に「現代病」というふうに言われているのは、ご承知のとおりです。そんなこんなで、皆さん鬱状態で、ストレスがかかり病気になっているのですが、とくにアメリカの同時多発テロ事件のように、超高層ビルから地上に叩き落とされる状況を目撃すると、誰でも精神がおかしくなります。

私はこの道の専門家ではありませんが、人間の本性の謎を自覚したというか、あるいは、悟ったというか、若い頃は我が侘な自分本意の弱い人間でしたが、最近は何度かの大きな試練を乗り越えて、人生観がまるっきり変わり、少々のストレスがかかっても撥ね除ける力が具わって「自分に命のある限り、決して負けたりはしない」という覚悟と、ある種の達観した人生観が出来ましたので、今日は『人間の本性の謎に迫る』という自著について話をさせていただきたいわけです。

普通は、このような話は宗教家がするもので、キリスト教の場合は「イエス・キリストはこう述べられた」というふうに、話の出所を旧約聖書や新約聖書に求め、あるいは、仏教の場合は「お釈迦さまはこうなされた」というふうに聖者の事蹟を辿ったりします。

しかし、私に言わせれば、それは宗教的伝承かも知れないけれども、実証されない限り当てにはならないと思うのです。

つまり、実証・実験を経ない限り、それは単なる信仰領域の話であって、自然科学的なスタンスで探求したものでなければ得心できないというのが、現代人の常識ではないでしょうか。

「共進化」という概念は「生命体は助け合いながら進化している」という新しい学説を踏まえた上に成り立っています。

そこで、私がいまご紹介申し上げる『人間の本性の謎に迫る』においては、一人間とは何かという問いかけについて〈自然科学のスタンス〉あるいは〈生命科学のスタンス〉を大事にしながらかいておきます。

一つ目の項目は、人間の生体メカニズムに焦点を当てておりますが、これは言い方を変えると自然の摂理で、人間にはバイオリズム (biorhythms ; 生体に見られる諸種の機能や行動の周期性) があって、これは、他の動物、昆虫も、鳥類も、魚類も、生命あるものはみんな持っております。

このように、生物はみんなバイオリズムを持っていますから、自然の摂理に合わさないと生きて行けないのでして、われわれは先ず〈人間の身体はどのようなメカニズムになっているのか〉を解明することが大事です。

二つ目の項目は進化論について書いており、皆さんご存じのダーウィン (Charles Robert Darwin、イギリスの生物学者。1809~1882) は進化論の巨人で「競争」と「闘争」が進化の大きな鍵となると提唱しました。

ところが、最近、ダーウィンの進化論では説明できないような事実が、若手の進化生態学者によって発見されたり、動物行動学というような学問分野が凄く進歩してきました。

このような現実を踏まえて「ダーウィンの考え方は、進化の一つの原理原則に過ぎなくて、総ての進化には、同じ重みでもう一つの原理原則がある」と言い出した学者が増えておりまして、例えば、最近、テレビ番組などで話題の共進化 (複数の種が互いに生存や繁殖に影響を及ぼし合いながら進化する現象) という概念は「生命体というのは、共に助け合いながら進化している」という新しい学説を踏まえた上に成り立っております。

全体と関わり合って生きるのが人間という存在で 一個人で生きるなどということはあり得ません。

これを、実証面から言うと「進化のプロセス (process 過程) の中で、どんな法則が働いているか」を解明することが大事で、これは人間の本性の謎を解く上での鍵になります。

例えば、助け合いということが、進化の大きな要因として存在する場合、人間の本性の中に〈助け合い〉が性 (さが) として存在するはずで。

もしも、これが進化の要因として無かったら、ダーウィンが言うように「競争」と「闘争」が進化の唯一の原理であるならば、われわれ人間が「お互いに助け合おう」と言ったとき「根拠は何か」と問われても答えることができません。

この間も、子どもを絞殺するという犯罪が起りましたが、犯罪者というのは精神が異常で、誰かを絞め殺したとき苦痛の叫びを聞くのが楽しいという心身状況にありますから、普段からそういう精神状態にならないことを、進化のプロセスに組み込んでおくことが大事です。

三つ目の項目は、人間のありふれた日常生活の中で、何か人間の本性を探り当てるような体験はないかということがあります。

例えば〈生殖行為〉というのは、ひとり人間に限らず、昆虫でも、鳥類でも、魚類でも、命あるもの総てにとって非常に大事な行為だということは自然の理です。

とくに人間の場合、夫婦が愛し合って子どもを産むという行為は、生き様の中の核心部分ですけれども、今は面白可笑しくエロチシズムとして見たり、逆に、厭らしいから触れないようにするとかいうことがあります。

しかし、この人間の生き様の中の最も重要な夫婦生活の秘儀の中にこそ、実は体験的に人間の本性を悟る秘密があるのですが、今日は時間の関係で省略いたします。

四つ目の項目は、人間を社会科学の視点から見つめながら、人間の本性に迫っております。そもそも、人間というのは一人では生きられなくて、生まれ落ちたその瞬間から、両親とか兄弟姉妹と一緒に暮らし、その周りには地域社会があつて、さらに国家社会があつて、地球社会があつて、われわれはその一員として、全体と関わり合つて生きるのが人間という存在です。したがって一個人で生きるというものはあり得ないのでして、昔、仙人が深山で独り住まいしたという話もありますが、これは神仙思想(中国古代の神秘思想)から来た物語に過ぎません。結局、人間というのは全体との関わりの中で生きているのでして、あらゆる物事は社会科学の目で見なければならぬわけです。

命あるものは命あるものからしか生じない というのがこの世の中の鉄則です。

私は先ほど、人間の生体メカニズムについて申し上げましたが、人間の身体には実に驚くべき仕組みがあります。まず、人間はどうしてこの世に生まれ出るかということ、父親の精子が母親の卵子の中に入った瞬間、サッと後光が射した状態になって（NHKテレビで放映）、新しい生命が誕生するわけです。

そして、この細胞が二つに分裂し、二つが四つに分裂し、四つが八つに分裂するというふうに、どんどん倍数の分裂を重ねて、最終的に人間の細胞は60兆くらいまで分化します。

しかも、分裂した細胞は全部生きており、これはどういうことかと言うと、最初の受精卵が持っていた命（いのち）を、60兆の細胞がみんな持つておるということです。

因に、最近、脚光を浴びているクローン（clone; 一個の細胞または生物から無性生殖的に増殖した生物の一群）技術というのは、特定の動物から細胞を一個取り出し、それを次々に増殖させて、同じ固体の増殖をはかる新しい技術です。

学者はいろいろ言いますが、一命あるものは命あるものからしか生じないというのが、この世の中の鉄則で、ただの一度も人造物から命が生じた事例はありません。

ノーベル物理学賞を受けた利根川進さんは「いずれ人工生命を作ることが可能になる」と述べられていて、失礼ですが、これは何かの錯覚だろうと思います。生命科学の大原則は「命あるものは、命あるものからしか生じない」ということです。

つまり、最初の一個の命のある細胞が分化するのでして、この細胞分化の進行過程で、あるグループは髪の毛になったり、あるグループは消化臓器を作ったりして、生体が出来上がっているわけです。

ノーベル賞科学者の利根川さんは「目に見えないモノは存在するとは言えません」と述べられています。

そして、このような細胞分裂によって作られた個々の臓器、つまり、胃、腸、心臓などに分化した内臓の特性は、山田さん、加藤さんなど、一人の人間が持っている命の特性でもあります。さらには、胃腸などの消化臓器がどんな働きをしているか、白血球や赤血球がどんな働きをしているか、ということがあって「人間はどうして生きているか」について一言で言えば〈物質代謝で生きている〉ということになります。

つまり、食物を摂取し、これを分解してアミノ酸に変え、タンパク質として摂っておりまして、このような人間には、一命（いのち）と言う目には見えないものが存在します。

ところが、このような〈命の存在〉を認めない学者がいて、有名な行動生物学者でノーベル賞を受けたリチャード・ドーキンスは「われわれ人間および他のあらゆる動物は、遺伝子によって創り出された機械に過ぎない。われわれは生存機械—遺伝子という名の利己的な分子を保存するべくプログラムされた機械なのだ」と述べております。しかも、彼の著書『遺伝子は利己的である。従って、人間は利己的である』という本は、世界的ベストセラーになっています。

さらに、わが国の分子生物学者のパイオニアで、生命科学分野で大きな影響力を持つ渡辺格氏は「地球上の生物はDNA型の生物で、それは物理・化学の法則で働いている物質機械であることが証明されている」と断定されており、このような—生物機械説、—人間機械説が、有力な生命学者によって提唱され、それが生命科学界を超えて、科学界一般の定説のように信頼されており、一般社会にも大きな影響を与え話題となっています。

ついでに言いますと、著名な評論家の立花隆さんと、ノーベル賞科学者の利根川進さんが対談されたとき、立花隆さんが「人間には命（心）というものがあって、これは機械論では説明できないでしょう」と言われたとき、利根川進さんは「目に見えないモノは存在するとは言えません。これは自然科学の鉄則です」と答えられていて、これは言い換えると「いまや数億倍の電子顕微鏡があって、どんなに微細な物質でも見るのが可能だから、これで捉えられないということは、そんなモノは存在しなくて、単なる空想に過ぎない」

という結論になって、学問的なレベルではこのような意見が唱えられていますが、私はこの辺に自然科学的手法の限界を感じます。

**人間の身体は一個一個の細胞から成り立っていますが
これらの細胞は自らの命を抛って全体のために働いています。**

それはさておき、人間の白血球の働きというものは、例えば、傷が化膿すると黄色い膿が出ますが、これを電子顕微鏡で見ると、白血球が外から入ったウイルスなどの病原菌と

戦った結果の死骸だということがわかります。

このことは、一人一人の人間が生きているのと同じように、白血球の一つ一つが生きている証拠で、この何百個か何千個かの白血球の軍団が、外から侵入した病原菌を殲滅するために戦う働きがあるということです。

あるいは、胃腸などの消化臓器もまた、外部から摂り入れた食物をせっせと消化・吸収して、身体全体に栄養分として送り届けております。

そして、身体のあらゆる部分の細胞は、巣の中でツバメの子が口を開けて親が餌を運んでくるのを待ち構えているのと同様に、酸素と栄養分が送られてくるのを待っているわけです。

この酸素と栄養分は、血液を使って送り届けますが、その血液の送り役は心臓が受け持っていて、人間がこの世に生を受けて死に至るまで、寸刻の休みもなく送り続けています。

要するに、人間の身体は一個一個の細胞によって成り立っていますが、これらの細胞は自らの命を抛って、身体全体の成長のために働き続けているわけです。

これを人間社会の歴史に例えると「義民」にも似た存在です。

『佐倉義民伝』で伝えられる義民というのは、佐倉近郷近在の百姓が干魃と増税に苦しんでいたときに、名主の佐倉惣五郎が、村民のための総代となって、将軍に直訴しましたが、捕えられて、妻子と共に磔にされたことで有名です。

この事実の中で重要なことは、当時の法制度で、一将軍への直訴は死刑であることを承知の上で、佐倉惣五郎という一人の人間が、周辺の苦しんでいる百姓たちを助けるために、自らの生命を投げ出して行動したという事実です。

そして、驚くべきことに、これと全く同じ事が、人間の生体メカニズムの中で、自然の摂理として行われているわけです。それは、アポトシスと呼ばれる細胞の生態で、具体的には、生きている細胞たちが、身体全体の成長を助けるために、自ら死を選んで自殺するという行為です。

「個が自らの生命を投げ出して全体のために尽くす」

という営みが身体の中で起こっているのです。

一例を挙げると、蚕（かいこ）は桑の葉を食べて成長し、やがてサナギになり、蛾になりますが、桑の葉を食べて育っていた頃の幼虫の細胞は、みんな用済みで死滅します。

あるいは、卵から孵化したカエルは、オタマジャクシとして尻尾が生えて水中を泳いでいますが、だんだん成長するにつれて、尻尾が短くなり、足が出揃って、一人前のカエルになると、尻尾は取れて、足で跳ね飛ぶようになります。

これは、細胞の段階で、いろんな変化が生じて、何百万個という細胞が死滅して、新しい細胞に生まれ変わり、オタマジャクシからカエルに進化していくわけです。

このようなメカニズム（mechanism;仕組み）は、人間の場合も全く同じでして、自然の

摂理の凄さを思い知らされます。

ラリソン・カドモアという有名な生命学者は、このような状況を見て、擬人的な表現を用い「彼（細胞）らは、キリスト教初期の熱心な信徒に勝るとも劣らぬほど献身的な働きを、自らを捨て身体全体に対して行なっている」というふうに感動的に書いておりまして、これは「〃個〃が自らの生命を投げ出して〃全体〃のために尽くす」という営みが、人間の身体の中で起こっているということでもあります。

所を選ばず身体全体の中で増殖を続けるガン細胞は とどのつまり人間そのものを滅亡に追いやっています。

ところが、このような細胞の働きとは逆の営みがあって、それはガン細胞の増殖でして、ガン細胞というのは、膵臓、肝臓、腎臓など、身体全体の中で我が物顔に増殖を続けるわけです。これを、会社に例えると、技術部は「いかに優れた商品を低コストで製造するか」を目指して技術開発に力を尽くし、工場はその技術を駆使して「いかに低コストで生産するか」に努力をし、営業部は「生産した商品の販売」に最善を尽くし、経理部は「会社全体の資金繰り」のために銀行との交渉を通じて、経営の潤滑油的な役割を果たします。

この場合、各部門共通の目的は「会社を発展させるには何が必要か」という命題の一点に絞られますが、時には稀ですけれども「これは内緒だよ！」と言って、工場の製品を持ち出して、横流しする連中がおります。

彼らは会社から相応の給料を貰いながら、裏側で自分だけの利益を計り、後は野となれ山となれで、会社全体の利益を損なっているわけです。

このような連中に対して、世間一般では「あ奴らはガンの存在だ」と言って軽蔑します。

彼らは組織内にあって、その恩恵を受けながら、自らの利得のために反逆しているわけで、このような事柄が人間の身体の中で進行しているのが、まさしくガン細胞の増殖です。

肺、胃腸、膵臓、肝臓、腎臓など、所を選ばず、身体全体の中で猛烈な勢いで増殖を続けるガン細胞は、栄養分は身体から吸い取りながら、身体全体のために貢献する働きは何一つせず、人間そのものを滅亡に追いやっています。

人間社会のガンの存在の連中がなしている事柄と、生体メカニズムの中でのガン細胞がなしている事柄は、まことに含蓄の深い事実であります。

—自分、自分で自己中心の行動をしていると 結果的に何の報奨も受けられず会社からはみ出します。

これは身体における〈個と全体の関わり〉ですけれども、この社会においても、全く同じことが言えます。つまり、個人は市町村など自治体に属しており、あるいは、どこかの

学校に在籍していたり、どこかの会社に勤めていたり、どこかの役所に勤務していたりします。そして、人間の身体の「個」と「全体」の関わりの中で、全体を生かすために個が働くということは自然の摂理であって、お釈迦さんとかキリストさんの感化によるわけではありません。要するに、われわれ人間という存在は、一社会人としては〈全体のために貢献する〉ことが、本来の自然の摂理に適う行為であって、なおかつ、その人の生き様も良くなるわけであります。

例えば、われわれがジョギングで足の筋肉を鍛えると、足の筋肉そのものを健康に維持できるのは当然の理ですが、同時に、身体全体の健康に貢献することができます。

あるいは、会社の発展のために貢献した部門は相応の報奨を受けますが、何の貢献もできなかった部門は報奨から除外され、世間の道理というのはそのようになっているわけです。要するに、常に会社とか社会に貢献していると、自ずと報奨はついて回りますが、逆に、一自分、自分というふうに自己中心で行動していると、結果的に何の報奨も受けられずに、会社や社会からはみ出さざるを得ません。

われわれ素人の意見は論理的に証明できませんから 専門家からは軽く見られてしまうところがあります。

筑波大学の名誉教授で、村上和雄さんという人、この方は『人間機械説』に反対の立場で、私たちはたいへん仲良くしています。

最近、お笑い番組を取り仕切っている吉本興業のタレントを筑波大学に呼び寄せて、学生たちを盛んに笑わせ、その後で難解な講義を行ない、その直後に血糖値の検査をして、肉体と心の間の因果関係を研究しておられるみたいです。

要するに、村上さんは「人間の健康にとって「心」というものが非常に重要な役割を果たしている」ということを言おうとされているのですが、一般の生物学者は、そういう心の作用をあまり認めておりません。

例えば、養老孟司さんという人、あの方は解剖学者で『唯脳論』を唱えられ、著書の『バカの壁』が百数十万部売れたというので、いまマスコミで脚光を浴びております。

もちろん、養老さんは立派な方だと思いますが、皮肉な話ですけれども、ご自分の専門分野で〈バカの壁〉に嵌まっておられるのではないかと私は見ております。

なぜなら、養老さんは大脳（とくに右脳）の働きで、人間の総てを説明されていて、目に見ることができない一命の働き（心の働き）というものを見過ごされているからです。

養老さんが解剖学の専門家だからこそ、このような〈バカの壁〉に嵌まってしまっているので、一般のわれわれ素人は「人間は大脳に総て支配されている」などとは絶対に思っておりません。ところが、素人の意見というのは、論理的に証明できませんから、専門家からは軽く見られてしまうところがあります。

意志が歩こうと決断した瞬間に第一歩を踏み出すのでして
私たちはそういう意志の存在を認めざるを得ないわけです。

例えば、筑波大学大学院システム情報工学研究科の山海嘉之教授は、歩行補助ロボットを研究されていて、これは、足が弱まった老人が「このまま座っていようか。それとも、立ち上がって前へ歩こうか」と迷っていて、歩こうと思った瞬間に、生体の中を微量の電気が流れて、この電気の指令を受けて太腿の筋肉が動きはじめ、足が前へ出て歩くことができるわけです。

そこで、歩行を補助するロボットを装着すると、老人の足が前へ出る一瞬早く作用して、その歩行を補助できるのですが、それはロボットが微弱な電流を感知して作動するからです。さらに、その微弱な電流が足を動かす因果関係をたどっていくと、原因は微弱な電流ですけれども、その微弱な電流を引き起こした第一原因は前へ踏み出そう」という紛れもないところの一人間の意志（精神）であります。

要するに、われわれ人間の意志が〈歩こう〉と決断した瞬間に、その第一歩を踏み出すのでして、私たちはそういう意志の存在を認めざるを得ないわけです。

〈ある不思議な奇跡〉をどう解けばよいかについては
脳生理学者・哲学者の双方から説得力ある回答は出ていません。

それでも、大脳生理学者たちは「何もかも脳の作用として説明できる」と言っておりますが、20世紀の卓越したイギリスの思想家バートランド・ラッセルは、このような難問の存在と、事の重要性に気付いて「意識の成立は不思議な奇跡だ」と率直に述べ、9300万マイルも離れた彼方にある太陽が、普通われわれが目にするような丸い真っ赤な太陽として、意識されるようになる状況について『神秘主義と理論』（江森巳之助訳、みすず書房）の中において「物理学によれば、ある種の電磁波が太陽から発せられて、約8分後にわれわれの目に到達するのだそうです。そこで電磁波は桿体や錐体に混乱を生ぜしめ、それが視神経に伝わり、さらに脳髄に伝達されます。

この純粋な物理的連鎖の最後に、ある不思議な奇跡が起こることによって〈太陽を見る〉と称する経験が得られるのです」と語っております。

しかし、この意識成立の謎〈ある不思議な奇跡〉をどう解けばよいかについては、脳生理学者の側からも、哲学者の側からも、説得力のある回答は提出されていませんが、拙著の第二章で、われわれの見解を詳述しております。

近代生物学のパラダイムは自然界を説明するのに
対立する力と力の情け容赦ない闘争の世界を叙述しています。

最後に、ちょっと進化の話をしませんが、この地球上に最初の生命が現われたのは数十億年前で、最初の単細胞生物から多細胞生物へ進化し、次に魚類として海中生活をし、やがて陸に上がって原始哺乳類になります。

さらに、進化を続けた原始哺乳類は、やがて猿人になって、原人になって、旧人になって、新人になって、そして現代人として今日に至ったのでして、これが人間としての進化の過程です。

この近代生物学のパラダイム (paradigm; 範例) は、自然界を説明するのに、対立する力と力の情け容赦ないすさまじい闘争の世界を叙述しておりまして、進化論の巨人であるイギリスの生物学者チャールズ・ダーウィンは「すべて自然は、生物と生物、生物と外的自然の闘争状態にある。自然の満ち足りた様相を見る限り、そうしたことは考えにくいかも知れないが、しかしよく見れば、それが事実であることが分かるはずである」と断言しております。

また、ダーウィンの友人であり、擁護者でもあった生物学者のトマス・ハクスリーは「動物界は古代ローマの剣闘士とほぼ同じ水準にある。強いもの、素早いもの、狡猾なものが、終わりのない闘いの日々を生き抜くのである」と言っております。さらに、ダーウィンは名著『種の起源』の記述の中で「限られた量の資源と、際限なく増え続ける各種生物の個体数増加が必然的にもたらす結果として、すべての生物は厳しい〃競争〃と〃闘争〃に曝されている」と述べております。

どうやら助け合って共存することが 進化にとって重要なキーワードであると言えます。

しかし、最近、欧米の進化生態学者の中には「進化は競争と闘争に曝された結果ではない」と言って、ダーウィンの進化論を見直す機運が高まってきております。

例えば、ある植物生理学者は「植物というのは、動物のように激しい競争も闘争も殺し合いもない。存在するのは、お互いに持ちつ持たれつの相互扶助で〈協調の原理〉が〈競争の原理〉に勝る」というふうに言っております。

あるいは、生物学者のジョウジ・スタンチュールと哲学者のロバート・オークローズの共著『新・進化論』によると「ある地域に生息する一つの種の個体数の増減は、同じ地域に他の種が生息しているか否かには、ほとんど関係していない」と言っております。

これらの事実から言えることは、自然界では競争的な闘争はなるだけ避けられるようになっておりまして、ダーウィン学説のパラダイム 一闘争・競争とともに、一平和・共存ということが、もう一つの原則であると言わざるを得ません。

さらに注目すべきことは、生命発生の原初の段階で、原核細胞から真核細胞への最初の進化が行われたのは、異なる能力を持った幾つかの原核細胞の〈集合・共生〉によるものだという事実です。

つまり、異種の生物の共生ということが、新しい種への進化、すなわち大進化ということに大きく寄与していることは明らかで、どうやら助け合って共存することが、進化にとって重要なキーワードであると言えます。例えば、松、杉、桧、その他、緑色の樹木は、光のエネルギーを用いて、空気中の二酸化炭素と水分で有機化合物を合成しますが、その光合成の際に排出する酸素は、動物にとって無くてはならないものであります。

また逆に、動物が排出した二酸化炭素は、植物にとっては重要な成長要素の一つであって、まさに動物・植物という生物は、寄り添い助け合って、生態系を維持しているのです。

社会人としての倫理を实践せざるを得なくなる根拠を —自然の摂理である事実に求めたのであります。

さて、持ち時間が無くなりましたから、この辺で終わりにしますが、今日のフォーラムでは、講演の主題に 『なぜ社会貢献は必要か』—人間の本性の謎に迫る—という一歩踏み込んだ命題を、敢えて掲げて、お話をさせていただきました。

その理由は、人々が普段、漠然と考えている物事の根拠を敢えて問うことにより—その人の生き様と人生の行動に、はっきりとした強い意志と姿勢が齎らされ、確信を持った生き方ができるようになることを願ってのことでありました。

今日のお話の特色は、高僧とか、哲学者とか、宗教学者等々がこう言われている だから こうしなさい といった受け売りではなくて、自然科学、生命科学などの実証の裏付けがあって、何人も認めざるを得ない学問を踏まえて、お話をしました。

人間の日常生活での行為や、社会人としての倫理を实践せざるを得なくなる根拠を—自然の摂理である事実に求めたのであります。そして、この事実は、厳然とした何人も逆らうことのできない自然の摂理である以上、われわれ人間は、その摂理と道理にしたがって、生きざるを得ないということでもあります。

どうか、皆さまのこれからの生き様も、自然の摂理を踏まえたものとして、堂々と確信を持って行動し、社会・国家に貢献して下さい。

(文責;栗山要,大脇準一郎)